

研究経過報告

平石賢二

ここでは1992年11月から現在に至るまでの研究経過について報告することにする。

I. 個人研究

個人研究としては、青年期発達に関する以下の2論文を執筆し、学会発表1件を行った。

平石賢二 1993 思春期への移行に伴う諸問題—学校移行と対処行動について 中等教育研究—名古屋大学教育学部 第4号, Pp.111-124.

平石賢二 印刷中 青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅱ)—重要な他者からの評価との関連—名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科 第40巻

平石賢二 1993 青年期における自己意識と重要な他者からの評価に関する研究 日本発達心理学会第4回大会発表論文集, 310.

II. 共同研究

共同研究としては以下の2つの研究課題について取り組んでいる。

1. 青年理論の矛盾と解決のためのミニ・モデルの提案—アイデンティティ形成と親子関係の観点から—(マツダ財団助成研究)

この研究課題に関しては、以下の学会発表1件(1993年11月27日, 於: 中央大学駿河台記念館)を予定している。

平石賢二・久世敏雄・大野久・長峰伸治 印刷中 青年期におけるアイデンティティ探求に関する研究—直面している課題とそれに対する対処行動の視点から—日本青年心理学会第1回大会発表論文集

2. 青少年の成長に関与する日本の教育力に関する学際的総合研究(日本生命財団助成研究)

この研究課題に関しては、「癒す力としての教育力—青少年のメンタルヘルス—」という下位の研究テーマの元で3つの研究グループを結成している。具体的な研究としては、以下の3件の学会発表を行った。

平石賢二・杉村和美 1993 青年期前期における Role strain について(Ⅰ)—ストレス反応およびコンピテンスとの関連—日本心理学会第57

回大会発表論文集, 571.

杉村和美・平石賢二 1993 青年期前期における Role strain について(Ⅱ) 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 207.

平石賢二・長谷川博一 印刷中 高校生における学校ストレス, 自己意識, 問題行動の関連 日本性格心理学会第2回大会発表論文集

また、この研究テーマの一環として、1993年11月に1週間ほど渡米し、アメリカの小・中学校を訪問した。そこでは、授業観察とスクールサイコロジストへのインタビューを行ったが、日本の教育環境を見直す良い機会となった。

III. その他

上記の研究のほかに次の2件の原稿を執筆した。

若林 満・平石賢二・金井篤子 印刷中 企業内におけるメンタルヘルスに関する調査 大学院独立専攻(発達臨床学専攻)における臨床的教育・訓練方法の追跡的研究(代表者 田畑治)—平成3・4年度国立大学「教育方法等改善経費」調査報告書—名古屋大学教育学部

平石賢二 1993 青年期における自己発達と社会的形成(第5章) 原岡一馬編 人間の社会的形成と変容 ナカニシヤ出版 Pp.66-76.

また、1993年6月より名古屋市教育委員会「学校適応を考える」調査研究委員会に委員として参加し始め、文部省のいう「無気力型登校拒否」に関する調査に着手している。名古屋市の小・中学校や教育委員会指導室の先生方との会議は今までにないとても新鮮な経験となっている。

以上、簡単に研究内容について述べてきた。この一年を振り返ると、日本教育心理学会第35回総会を主催したこともあり、データを論文にまとめる作業が遅れてしまったことが第一の反省点として挙げられる。継続してデータ収集を行っている研究もあるが、とりあえず現在手元にあるデータの分析と論文作成を優先したいと考えている。

(1993年11月13日記)